

チム旭

印刷を支え加工を活かす

無線綴じ部門 佐久川 翔夢

高校3年の終わりごろ。高校の担当教諭にすすめられて会社見学に来た際に目の当たりにした製本の様子に楽しさと興味を抱いて入社を決めた佐久川翔夢さん。2023年4月1日の入社から、「皆さん優しい」という先輩方や上司に支えられて過ごした1年ちよつとの歩みを振り返ってもらいました。



——まずは、現在の仕事内容を教えてください。

入社してから現在まで無線綴じの部署で仕事をしています。メンバーは外国人実習生も合わせて10名。実習生の多くはタイ出身です。手がけている製本は比較的厚手のもので、たとえば、観光案内、学校で使う問題集など。メンバーは1階と2階にわかれ、それぞれ1台ずつ設置された機械を使って作業しています。大まかには紙の帳合、糊付け、表紙付け、三方断裁という流れで製本しており、カレンダーの繁忙期にはカレンダー製作にも携わっています。

——これまで苦労したこと、大変だったことはありませんか。

大きく2つあります。1つは入社当初、作業がまったくわからなかったこと。たとえば、機械に紙を正しくなにか話しかけられない性格を反省して、多くの方とのかかわりを増やしたいと思っています。皆さんとのコミュニケーションがより円滑になれば、仕事ももっと効率的に進められるはず。要望や意見を発信したり、質問をしたりと、コミュニケーション面で積極性を出すよう努力します。



と感じたときには、まずは自ら作業する様子を見てもらうようにしています。普段、6名の外国人実習生にそれぞれ異なる作業内容を説明するのは大変ですが、正しく作業を理解してもらうよう努めています。

——仕事におけるモットーはありますか。

どのような状況でも焦らないことです。もともと、焦らず丁寧に作業しようという性格なのですが、この仕事を始めてからより一層「焦らないこと」の大切さを感じています。焦ればミスをしたり、不具合が出たり、自分がけがをしたり、相手にけがをさせたりと、良いことはありません。焦りそうな状況ほどまずは冷静になるよう意識しています。機械作業はけがすることも少なくありません。しかし、私はこれまで大きなけがもなく勤めてこられました。これも焦らないからこそだと思います。

——最後に、今後の目標を教えてください。

一つひとつ、着実に自分ができることを増やしていきたい、周囲の皆さんの負担を少しでも減らせる戦力になることです。また、自分からな

セットするのも、要領を得ず、時間がかかるばかり。数をこなしてある程度早くできるように、今では作業を任せてもらえるようになりました。現在は表紙の背文字を定位置に合わせるセットの仕方を、先輩の作業を見て、コツを聞いて勉強している最中。早く一人で作業できるようにになりたいと思っています。

もう1つ苦労したのは外国人実習生とのコミュニケーションです。なかなか日本語が通じず、仕事の説明に四苦八苦。試行錯誤の末、今では言葉で説明しても伝えきれない



企業情報

- ◆ 創 立 年 : 1983 年 1 月
- ※ 創 業 : 1963 年
- ◆ 年 商 : 17.6 億 円
- ◆ 従 業 員 数 : 200 人

ビジョンとパッション

第7弾

旭紙工には、あなたの知らない魅力がまだまだたくさんあります！
工場長の山野さんが語る旭紙工の強みは、現場に立つ人ならではの視点が詰まっています。
読んだ後には思わず「これからも一緒に頑張っていきたい」と感じるはずです！

旭紙工の
ここがすごい！

強み

大ロットも小ロットも、 24時間休まず対応！

24時間体制で機械が稼働している点が大きな特長です。断裁、折り加工、中綴じの機械が数多く揃っており、他社には負けない大ロット生産ができるところが強み。ブッシュ抜き、特殊折り、のり綴じ、傾き製本などの多彩な加工も可能です。小さな製本から大きな製本まで幅広く対応しています。

ピンチには

19人が駆けつける結束力！

自慢したいのは、強い仲間意識と、いざというときに発揮される底力！急ぎの仕事にも快く対応してくれる人たちがばかりです。あるとき、休日に突発的なクレーム対応が起きた際には、19人もの作業員が駆けつけて助けてくれました。

年代的には中間層がやや薄いのですが、30代後半以上のメンバーはベテラン揃い。新人を支えてくれる頼もしい存在です。

今後長期的に成し遂げたいこと

1人1台の 体制構築へ向けて、 オペレーターの適性を判断

1つの機械に1人のセットオペレーターを付けることです。旭紙工は機械の台数が多く、それを操作するオペレーターが少ない状況にあります。他社であれば1人が1台を担当するのが一般的なのですが、当社はオペレーターが1つの機械をセットしたら、また次の機械をセットしての繰り返し。この現状を脱するためのヒントの一つは、各オペレーターにどの機械が合っているのか、向き不向きを判断し適切な配置を行うこと。たとえば、瓜破工場には中綴じの機械が9ラインあるのですが、それらが全部同じ機械ではありません。機械が違えば、構造も扱い方も違ってきます。そのため、人によって「この機械は得意だが、こちらの機械は苦手」というような傾向が出てくるのです。適性を見極めながらその人に向いている機械を割り振れば、効率的に作業を進められると考えます。

山野工場長の 考えとは？

工場本部
瓜破工場 工場長
やまの ひろゆき
山野 博之さん



工場長としての信念

最初から「できない」と 言ったら 何もできなくなる

営業から「この仕事、できますか」と難しい相談があっても、無下に断らず、「まずはできるかどうかテストをさせて」と前向きな回答をするように心がけています。「できない」という判断は、試してみて初めて下せるもの。ひとまず取り組んでみて、結果的にできなかつたら最後に「できない」という答えを出せば良いのです。最初から「できない」と言ってしまうと、何でも「できない」になってしまいますから。ちなみに、こういう事例は、実際に試してみると意外とできてしまうことがほとんど。いつも難しい部分を何とかしてクリアしてしまうため、今まで「できなかった」というケースはありません！

仕事をする上で大切にしている考え方

経験を信じ、 基本を守って次世代へ繋ぐ

基本を大切に、丁寧に仕事をする事です。横着して手を抜いたら痛い目に遭った……という経験が過去に何度もあり、それから大切にするようになりました。工場長という立場ですが、忙しいときや急な休みが発生した際には、今もラインに入ることがあります。そのときにもやはり基本は徹底して作業するように気をつけています。そして、教育をする際には、こうした経験を踏まえ、自分がかつて苦労した点や失敗談などを伝えながら、作業のポイントを教えるようにしています。私の経験が後輩たちの役に立てば本望です！

